

## 子どもの世界



村石京子

三月に、二年間あるいは三年間いっ

くしんだ子どもたちを小学校へ送り出し、四月、新しい三歳児を迎えました。五歳児の三学期に、仲間同士で語り合い、あそびを計画し、行動する子どもたちと過ごして来て、それを当然のように受けとめていた私には、三歳児という年齢を頭の中ではよく考えていたつもりでしたのに、実際に手元を迎えた三歳児のその幼さ、たどたどしさ、そして愛らしさは予想を越えた感

がありました。

当初は、自分の身のまわりのこと一つにしても、靴も満足にはけなかったり、手洗いに行ってもお人形のようにただ立ったままでいる姿に、三歳児とはこんなだったのかと今さらながらとまどう毎日でした。それでも一ヵ月経ち二ヵ月経つと、けんかをしたり泣いたりしながらも毎日一緒にいる子どもたちの間には、淡い連帯感、仲間意識が生れてくるようです。最初は「あの

子がね」とか「お友だちは」などいっていたのに、いつの間にかお互いに名前を覚えて呼びあったり、姿の見えない子どものことは「○○ちゃんは今日はお休みなの？」と気にして聞いたりするようになりました。友だち同士だけで遊べる人たちも少しずつ出て来ました。そんな姿を見ていると、これが幼稚園に毎日通っていることよって生み出した子どもたちの世界、子どもたちの社会なのだとしみじみ思うのです。はじめはばらばらだった個々がより集まって一つの集団を形づくっていく過程をつぶさに感じさせられるこのころです。

次に、時が経つと忘れてしまう三歳児の姿、小さな心の動きを幾つかとりあげてみながら、三歳児の世界をかい間見てみたいと思います。

## 。はじめての共通の話題と協議

明日はいよいようれしい遠足です。

この間から、あと三つねると遠足、あと二つで遠足と指折り数えて待っていました。話題もそのことが多くきかれます。「私、遠足のハンド、ブック、買ったの、赤いのよ」とI子がいうと、「私もあるもの」とT子がすぐ応じられるのは、以心伝心でリュックサックのこたとすぐ通じてしまうからでしょう。

でも今日はいくの雨降り、明日の遠足は無事行けるかどうか大人も子どももとても気になります。窓の外を眺めては、「雨降ってるね」といいながら何人か一緒に雨足をじっと見たりしていました。帰る前に、「明日お天気がなったらみんなで遠足に行きましようね」というと、みんなうなずいていましたが、M夫が「雨降っても行こ

うよ、傘さして行けばいいよ」と突然言い出しました。「そうしようか、傘さして行こうか、私も傘あるもの」と口々に言います。そして真面目な顔で「先生は傘ないの?」「私入れてあげる」というのです。

いつもはなかなか話を聞かなかったり、勝手なおしゃべりに忙しい子どもたちが、Mちゃんの提案により衆議一決、こちらが異論をさしはさむ余地のないほどあざやかに意見がまとまりました。小さな胸を痛めていた雨の中を、しっかりと傘をさして帰宅の途につきました。

内心困っているのは私だけ……。でも翌日は心天に通ずで、暑いほどの好天に恵まれ、級協議による雨天決行はありませんでしたが、三歳児でも、級全体で一つのことを考え、話し合うことも場合によってはできるのでね。

次は三歳児ならではのエピソードを幾つかご紹介してみましよう。

## 。大切なバンドエイド

Aちゃんが庭を走っていてころびました。園庭には砂利が敷いてあるので、ひざ小僧をつけて二、三カ所ちょっと血がにじんでいます。自分のひざをしげしげと見て「Aちゃんの足、あなあいちゃったよ」——私はあなのあいた足を消毒してバンドエイドをはってあげました。

二、三日してA夫の母から「この間、幼稚園ではっていただいたバンドエイドが大切で、家ではどうしてもはりかえさせません」と笑いながら報告がありました。

## 。うさぎの赤ちゃん

幼稚園で飼っているうさぎが赤ちゃん

んを五匹ばかり産みました。生れたばかりのうさぎは大人の指位で、あのふわふわの白い毛なんかちつともなくて赤くてぐにやぐにやしています。

「あれがうさぎの赤ちゃんよ」と説明されて、子どもたちは不思議そうに見つめていました。

何日かしてK君のお姉さん(小学生)が帰りの時間に迎えにやっ来て来ました。そして、「うさぎの赤ちゃんを見せて下さい」と小声で頼むのです。それからお母さんの説明がありました。

「この間から毎日のように、K男が、ぼくの幼稚園には赤くて小さなうさぎの赤ちゃんがいるんだよ。お姉ちゃんなんか赤いうさぎ見たことないだろうと自慢するもので、今日はとうとうたまたまなくなつてついで来ました」と。

私はK君とお姉さんをうさぎ小屋に

連れて行き、姉弟で一先懸命鬼の赤ちゃんを眺めているようすを見ていました。お姉さんは赤いうさぎの正体に納得がいき、彼も満足したらしいようすでした。

### 。鬼さんのコイビト

初めて鬼ごっこをした日のことです。大勢でジャンケンをしてもなかなか鬼がきまりません。結局鬼は先生といふことになって追いかけっこが始まりました。遊び方の基本的なルールがわかる子どももいるし、よくわからない子どももいるはずなのに、ふん囲気でみんなはワッと走って逃げて行きました。「つかまえた」「つかまえた」と何人つかまえてもいつまでも鬼は先生ばかりで、子どもたちはどンドン逃げたしまい、それが楽しく嬉々として走

りまわっています。

こんな形の鬼ごっこをししばらく続けているうち、逃げて走っていたS夫がつともどって来て私と手をつなぐようになりました。この子は友だちと遊ぶよりもまだ私のそばに居ることが多いので、友だちの方へ行かせようと思つて、「Sちゃん、先生は鬼ですよ。みんなのいる方に行かないとつかまえてやうわよ」と言いました。

するとS男はすました顔で、「ぼく、鬼さんのコイビトになるの、だから手つないでいいでしょ」といふのです。そして「ぼく、先生と仲よしだものネ」と念をおすのです。私はS夫と手をつなぎながら鬼ごっこを続けました。

「三歳児」って本当に可愛らしいと思うこのごろです。

(お茶の水幼稚園)